



ホームページアドレス <http://www1.com.ne.jp/~mizumaki>

発行・カトリック水巻教会
編集・広報委員会
遠賀郡水巻町頃末南1丁目35-3
〒807-0025
TEL 093 (201) 0680 FAX (201) 7354
第315号

キリストは中心

マヘル神父

今年の夏は大変暑かったですね。皆さん、無事に暮らしていらっしゃいますか。8月は、3日間の入院、高知の兄を訪問、被昇天の祝日、木森さんの通夜、葬儀と忙しい日々でした。今年は私にとって、水巻教会での初めての被昇天の祝日でした。ミサの参加、納骨堂訪問の方も多く、良いお祝いのミサでした。そして、4月から8月までの間を見て、この共同体はよく動いているなあ、という印象を持ちました。

イエズス様が、わたし達共同体の中心であるなら、健康的な共同体です。そこでもう一度、水巻教会共同体が、より健康的であるために、3つの要素を踏まえ、皆さんと考えたいと思います。その円熟する為の、3つの要素とは、福音、交流、奉仕です。

1、福音とは、これは、神がイエズス・キリストにおいて、私達の中においでになり、死去され、死から復活し、そして私達の中に存在していること、又、私達が無条件に愛され、許され、受け入れられているという喜びのニュース。

2、交流とは、他の少数ずつのキリスト信者との深い交わりを意味します。メンバーは互いに心を開いて仮面をはずし、正直で、見栄を張らない、分かち合う交流があります。

3、奉仕とは、社会に対する奉仕を意味します。奉仕の目的は、漠然とした、いい気持ちの善行ではなく、真の兄弟愛にもとづいているので、永続性を失わないのです。

以上、3つの要素がキリスト信者自身、教会の健全さと発展のために必要なものです。これらの3つの要素は互いに関連しあっているので、たとえば、聖書が核心となっていなければ、交流は表面だけの交際となるだけであり、交流が浅ければ、奉仕は決して実を結ばないのです。これらの3つの要素を、私達の実生活に当てはめてみる時、キリスト信者は、キリストの次の言葉を実感するに違いありません。

「私が来たのは、彼らが生命（いのち）を得、又それを豊かにたもつためです」（ヨハネ 10：10）

洗礼で、私達はイエズス様の呼び出しをいただいて、世の救いの協力者になりました。教会の共同体と一緒に、その使命果たしましょう。

社会問題に向き合う・・・	2・3面
8・11 平和の集いについて・・・	4～6面
福岡教区信徒協研修会お知らせ・・・	6面
信仰の証・・・	7面
聖書への案内・・・	7面
おしらせ・・・	8面
今月の聖人・・・	8面

社会問題に向き合うカトリック教会の基本姿勢

Q10 教皇や教皇庁は日本司教団の社会的な動きに対し、どのような見解をもっていますか？

A 1 2007年12月の日本司教団のアド・リミナ訪問において、教皇ベネディクト十六世は司教団との謁見で、その社会的活動について次のように述べました。

他の国々が日本から学べることもあります。それは、日本が古来の文化の中で蓄積してきた知恵、また、とくに過去60年間、国際政治において日本がとってきた立場を特徴づける、平和へのあかしです。皆様は、武力紛争が罪のない人々に多くの苦しみをもたらしめている世界の中で、この平和へのあかしの変わることもない重要性について、ますます教会の声を示してこられました。わたしは、皆様が日本の国民生活における公共的なことに関して発言し続け、さまざまな声明の広報と宣伝に努めてくださるよう勧めます。それは、これらの声明が社会のあらゆるレベルで適切なしかたで知られるようになるためです。こうして福音のもたらす希望の知らせは、人々の心と思いと真の意味で触れるようになります。そこから、人々は、未来への確信を強め、いのちへの愛と尊重を深め、皆様の国に住む外国人や滞在者に対してより開かれた心をもつことができるようになるのです。「希望をもつ人は、生き方が変わります。新しいいのちのたまものを与えられるからです」

2 2005年から2011年まで駐日ローマ教皇大使を務めたアルベルト・ボッター

リ・デ・カステソロ大司教は、年に二回開催される司教総会の開催時のあいさつで、たびたび日本の司教たちの社会に対する働きかけについて触れています。これらは、教皇の信任を受けた大使が公式に述べる言葉です。

一皆さまは、人間のいのちの尊厳にかかわるさまざまなことから、正義と平和の諸問題に関して重要な声明を発表されました。皆様が準備しておられる、日本における政教分離の原則に関する声明は、人間の政治・社会活動の真理に関する皆様の教えの一部分をなすものです。わたしはこの作業に関心をもって見守り、この声明が日本だけでなく他の国にとっても意味のあるものとなるように祈ります。(2006年6月12日、2006年度定例司教総会)

一政治的・社会的な諸問題に関する皆様の教説が、聖職者と信者を導き、教えるだけでなく、日本の政治的・社会的発展にかかわるすべての人にとって靈感と勇気の源泉となりますように祈ります。(2007年2月19日、2006年度臨時司教総会)

一最近成立した、新しい「教育基本法」と、「日本国憲法の改正手続に関する法律」は、日本国内だけでなく世界の多くの国々においても、多くの人々の懸念を引き起こしています。人々は言論の自由や信教の自由が損なわれることや、戦争放棄(それは日本国憲法に記され、多くの人にとって、人類が紛争解

決のために暴力を用いないことへの希望と祈りの象徴です)が、人類の利益によってそれほど重要でないことに取って代わられることを心配しています。皆様は、政教分離の原則、憲法九条が日本だけでなく他国に対してももつ価値、そして平和のために働くことの重要性について、さまざまな明確な声明を出してくれました。これらはまことに称賛すべき勇気ある声明です。わたしはこの機会に、これらの声明と、平和と社会の一致を守るための皆様の努力をわたしが支持することを確認させていただきたいと思います。この平和のおかげで、日本の教会は発展し、日本も過去 50 年以上の間繁栄できたからです。多くの方が、今、明確な方向づけと勇気ある指導を期待しています。わたしは皆様の最近の声明が日本の未来と世界平和に関心をもつすべての人から大いに歓迎されることを確信しています。(2007 年 6 月 18 日、2007 年度定例司教総会)

一社会司教委員会の文書「2009 いのちを守るための緊急アピール」を興味深く拝見しました。信者が同時代の問題に照らして信仰を理解するための助けとなる、このような発言が教会の中で必要とされています。ローマの教皇庁正義と平和評議会の作成による『教会の社会教説綱要』日本語版の刊行もたたえたいと思います。これもすばらしい事業です。(2009 年 2 月 16 日、2008 年度臨時司教総会)

一新たに始まる裁判員制度に関する問題について、できるだけ早く議論しなければならないことはいうまでもありません。これ

は信者の良心の問題にかかわるからです。

一貧しい国々から日本に来た人々にとって、仕事を見つけ働き続けることは困難です。そればかりか、移住者も景気後退のために大きな不安と不安定に苦しんでいます。(中略)わたしは、司祭、修道者、信徒が、移住者の側に立ち、彼らを助け、支えようと努めておられるのを知っております。このような形で愛のわざと司牧的配慮を行うことは、日本のカトリック教会の寛大な心を深くあかししています。(2010 年 6 月 14 日、2010 年度定例司教総会)

以上のことから、日本の司教団は教皇と教皇大使の意向に一致して社会問題に取り組んでいる、ということが分かります。

また『教会の社会教説綱要』もこれを追認しています。「社会教説は司教たちの教導権に含まれ、それぞれの地域における固有の状況に合わせて明確化され、解釈され、実践されるのです。

また司教たちの社会教説は、ローマ教皇の教導権に対して効果的な貢献を果たし、それに勢いを与えます。このようにして、社会教説においては、教皇と、教皇と交わりのある司教の一致を浮き彫りにする一種の循環が成立するのです。そして、教皇の普遍的教導権と司教たちの地域教会における教導権が補完し合い、統合されていくことによって、教説全体が形成されていくのです」。

つまり、それは社会教説を明確に宣言する教皇庁と、社会教説が具体的に実践される現場との間の対話のプロセスなのです。

8.11 平和の集いについて



「平和の集い」が「平和への努力は時のしるし」をテーマに小倉教会で開かれました。北九州信徒使徒職協議会が毎年4月から実行委員会を立ち上げて主催しています。平和を祈るこの行事は今年で13回目を迎えました。夏休み期間中の暑い真っ盛りになぜ、と思われる方もあるでしょう。集いの開催日程は、広島に原爆が投下された8月6日から、終戦の15日（聖母被昇天の日）の平和旬間中の日曜日となっています。夏の熱い日差しのもとで原子爆弾の熱線と放射能を浴びた方達に思いを寄せ、平和への願いを共に語り継ぎ、祈ります。午前中は各小教区で平和を祈願するミサに始まり、午後1時から小倉教会に集います。今年は水巻教会から20数名の信徒と神父様が一緒にバスで参加しました。祈りの霊的花束と東日本大震災被災者のための献金、教会学校の子供たちが作成した共同祈願冊子を奉納しました。

マヘル神父様が週報等でたびたび呼びかけてくださったのに、祈りの紙片を箱に入れてくださったのは19名でした。書かれた数字以上に祈ってくださる方がおられたと思いますが、気持ちを形にする努力も必要ではないかと思います。献金は19,160円でした。よその教会学校の作品には、美しい貼り絵や折り鶴の冠などがありました。

活動グループ発表では、2月から3月にかけて被災者支援ボランティアに行かれた湯川教会の植木屋さんや青年たちの大船渡体験、ダルク(薬物依存者支援)の方から社会復帰に向けての支援活動、九条の会のコントなどがありました。憲法が改定されるとどういった恐れがあるのかは、考えさせられました。

今年のメインスピーカーは、広島教区幟町教会主任司祭の後藤正史神父様で、「国是と信仰」お話は分かりやすく、示唆に富んだものでした。福者ヨハネパウロ2世は、広島で「過去を心に刻むことは未来に向かって歩みを起こすことです」と語られました。広島、長崎の悲惨な体験の記憶を風化させてはいけません。過去を水に流すという日本人は忘れっぽい。歴史を今ここにあることとして見つめよう。日本は、一人一人が自立した言動をする社会でなく、周囲やお上(かみ)を基準にする世間がある。教会は、社会の魂あるいはパン種となって、社会でなされる選択や決定に無関心であってはいけません。

典礼委員 矢田公美

なお交流タイム(5つの活動グループの発表)については、以降に三谷氏によって詳しく記述します。後藤神父による講演「国是と信仰」については、来月号に詳しく掲載する予定です。

平和の集い 交流タイム(5つの活動グループの発表)

①震災復興・大槌のボランティア 湯川教会、濱田さん

湯川教会の濱田さんは、植木の手入れが本職で、3～4月には仕事が途切れるので、それを利用し、当地に行ったそうです。現在、当地で行われていた主たる改善事業は、地盤沈下した土地のかさ上げ。それに先立ち、家屋の土台を壊す必要あり、土埃が舞っていたそうです。ボランティアの仕事としては、お茶っこ呼ばれる、お茶を飲みつつ被災地の方と語って頂くことで、被災者の悩みを聞きだすことができます。

当地では、子供への虐待が増えていると、聴きました。その点、ボランティアの仕事に

は、心に関わる役割があり、年寄りでもする仕事がある；頑強な体でなく、杖を付いて来ることでも十分；また子供も来て欲しく、現地の子どもと遊ぶことでも十分です。また観光に訪れるのでもよいのです、と語られました。

2年前に比べると、被災地が忘れられてきています。かつては、ボランティア団体がいくつか入っていたが、引き上げたとのこと。

皆さん、是非、現地に赴いて下さい。当地で何をするかは二の次です。何かを感じることができましょう。

②震災復興・大船渡でのボランティア 小倉教会 福田さん、北川さん

若手女性2人(一人は高校生)が、大船渡に行き、スライド映写を交えながら、現地の状況とご当人の活動が伝えられ、当地

の教会で聖書の勉強会も行いながら、児童施設での子どもとの交流、瓦礫撤去や花壇づくりに参加したことが報告されました。

③若松教会のエキュメニカル(プロテスタントカトリックの協同)運動

若松地区では、明治期から今日に至るまで、多少の教会の増減を伴いながら、プロテスタント教会複数(バプテスト教会、日本基督教団)と、カトリック若松教会との、合同行事が行われています。昔の記録では、天長節、連合祈禱会、法説会(講演会)、慈善事業、元旦礼拝、歓送迎会(ここでは牧師の異動も対象となる)が、見られるとのこと。現在でも、新年の合同礼拝、市民クリスマス会・コンサート、歓送迎会、2年に1回のレクリエーション等が行われ

ているそうです。

ここでは、キリスト教としては共通の十字、その十字の切り方がプロテスタントでは違うとか、告解がないとか、聖体拝領は聖餐式と呼ばれ、回数が極端に少ないとか、そういう違いを強調するのではなく、聖書を大切にすることに関心を持ち、福音という課題に一致を見るといふ点が大変だ、と締めくくられました。

④ダルクの会（薬物依存症からの脱却を支援する会）

話に先立って、司会者によって、当平和の集いの会場（小倉教会）のテント群のほとんどは、このメンバー（メンバーと言っても、多くがまさに薬物依存から復帰した方々）が、献身的に設営したものであることが紹介されました。当会は、歴史的には25年以上、規模は全国70か所に及ぶもので、ここで登場された方々は、NPO北九州ダルクを結成しているそうです。この

発表者も、10年間薬物に苦しみ、やめるに困難を伴ったが、この会にお世話になり、ダルク・プログラムという方式で律することができ、社会復帰を果たせたそうです。

現在、この支援メンバーは8名。依存症者の回復を目指し、折に触れ、病院への訪問、刑務所への訪問も行う。ただ、運営費が不足し、この点、是非、協力頂きたいとのこと。

⑤平和コント

ほぼ、毎年登場する「平和コント」（9条の会）。今年は、安部首相に見られる国家主義的な方針からすると、恐れるべき事態が202×年に来るかも、という寸劇（5テーマ）が、面白く行われました。例えば、子供が、「イエス様が一番」と歌っていたら、近所のおばさんが、「日本は天皇が一

番なのじゃないか、そんな歌を歌っていいのか」と文句を言う。貧困な家庭の子どもは、大学に行きたいがために、まず「国防軍」に入り奨学金を得て、それを資金として、大学に入る道を選ぶ、そんな時代になる、というものです。最後に、憲法9条の大切さについて、訴えられました。

福岡教区信徒使徒職協議会 研修会のお知らせ

日 時 9月23日(月) 10時から

場 所 カトリック大名町教会

教区信徒協は毎年秋に研修会を開催しています。当初は小教区役員を対象にしていたのですが、現代社会に対応できる新しい教会の在り方を考えるために、参加者は役員に限らないことにしました。そのためある教会は毎回、司祭と一緒に何人もの人が参加しています。

北九州地区からも毎回、各教会の役員を含めて50人以上の人たちが参加して、新しい教会の課題について議論に加わっています。

しかし、残念ながら水巻教会の役員は、今まで誰も参加していません。

今年は小教区の旅行と重なっていますが、もし参加してみようという方はぜひ参加してください。参加希望者は、当日の弁当の関係もありますので、広報委員会の岩本までお知らせください。

6月2日 大人の日曜学校の報告(3)

信者の証し(信仰への道)、今回は第3回目。小笠原信子さんのお話を掲載させていただきます。今回は、小笠原さん自身でなく、広報委員が書き留めた記録を使うことをご容赦下さい。

信 仰 の 証

梅の木地区 小笠原 信子

小笠原信子さんは萩に生まれました。7人兄弟の2番目でした。ご家庭は熱心な仏教の信仰をもっていらっしゃるということです。

残念ながら信子さんは、若くして結核になられ、萩の修道会の経営するサナトリウムで療養することになりました。この療養中、小笠原さんから見たら「お姉さん」と思える若い女性も、同じく療養中でしたが、この人の深い人格と信心深さに惹かれ、カトリックの信仰に入ることになりました。

やがて、幸い健康は取り戻され、同じ修道会の経営するカトリック学校(光塩女子学園)の事務員になられました。実にそこで、のちのご主人、小笠原勝己さんと知り合わせ、結婚されることになりました。

やがてご主人が転勤、共に芦屋に来られ、これがご二人がわれらが水巻教会に転入される、という大きな喜びの訪れをもたらしました。ご存知のとおり、長年、ご主人は我が教会の信徒会長として活躍して頂いたわけです。

数十年の後、残念ながら、ご主人は病気がちになられ、それを契機に、ご主人を病院にお連れするために、信子さんは運転免許を取られました。

しかし、運転免許が役立たないうちに、ご主人が亡くなられるという悲運が訪れたそうです。しかし、そこからが信子さんの人徳と神の見はからいで、運転免許を役立てるべく、カトリック信徒の病者訪問に活用することを考えられました。それがやがて、水巻教会のサークル「クリストフォール」の設立につながりました。



聖書への案内 No.38

ヨハネの手紙 二・三

二つとも短い手紙ですが、「長老のわたしから、選ばれた夫人とその子たちへ」から始まる二の手紙と、「長老のわたしから、愛するガイオへ」から始まる三の手紙は、同じ人物によって書かれたことが分かります。

二の手紙は、エフェソ地方にいる長老から、「選ばれた夫人」という表現で書かれています。が、小アジア地方の信徒に向けて書かれています。

また、三は、エフェソ地方の信徒であるガイオに向けて書いてあります。この二本の手紙には信仰の基本が短く分かりやすく書いてあり、その容から二世紀初めの教会の実情が分かる手紙であると言われています。



★敬老お祝い会★

日 時：9月8日(日) ミサ後

場 所：水巻教会 信徒会館

今年も敬老のお祝い会をします。お手伝いできる方は、ご協力ください。

★特別献金★

8月11日 北九州平和の集い献金

19,160円

ご協力、ありがとうございました。

★ホームレス炊き出し支援★

日 時：9月13日(金) 10時より

場 所：水巻教会 信徒会館

多数の方のお手伝いをお願いします。

★巡礼日帰り旅行★

日 時：9月23日(月) 8時～18時

集 合：水巻教会 8時出発

行き先：今村教会(見学とミサ)

大刀洗平和記念館・麒麟ビール工場

参加希望の方は、申し込み用紙に記名をしてください。詳しい内容は、聖堂の後ろの掲示板をご覧ください。



【帰天】安らかに

◇8月14日

木森 二弥さん(折尾地区)



今月の聖人 30日 聖ヒエロニモ司祭教会博士

347年-420年

古代教会の重要なラテン教父であるヒエロニモは、ダルマチア（現オーストリア）の裕福なキリスト信者の家に生まれました。恵まれた環境と豊かな才能によって、短期間でギリシャ語とラテン語を習得し、ローマに留学して8年間修辞学を勉強しました。そのころ、修道生活に入ることを望み、アクィレアで隠修士の仲間に入り、その後東シリアの荒野に行き、聖書を研究しヘブライ語を学びました。そしてアンチオキアに戻ってから司祭に叙階され、380年ころ司教とともにコンスタンチノーブルに行き、ニッサのグレゴリオなどと親交を持ちました。382年から385年まで教皇ダマソ1世に仕え、聖書をヘブライ語からラテン語に翻訳したブルガタ聖書を完成し、聖書の注釈書も著わしました。教皇の死後、ヒエロニモの反対者によってローマを追われ、仲間とともにベトレヘムに行き、男子と女子の修道院を創立し、また聖地巡礼者のための宿泊所も建てました。晩年は、民族大移動時代と重なり、多くの困難に見舞われましたが、修道院を守り抜き、著作活動に励みました。

現在もカトリック教会で使われているラテン語訳聖書は、彼によるものです。ヒエロニモは、大学、神学科の守護の聖人とされています。